

手紙からみる T. S. エリオットの第一次大戦

World War I Represented in the Letters of T. S. Eliot

吉 村 圭

Kei Yoshimura

はじめに

T. S. エリオット (T. S. Eliot) が詩人として活躍した時期は、20世紀に行われた2つの大戦の時期と奇妙なほどに一致する。それにも関わらず、森山泰夫が指摘するように、エリオットは戦争をテーマとした詩を書くことも、戦争を論じた批評を書くこともほとんどなかった。¹ しかし、とりわけ第一次大戦の行われた1914年から1918年は、哲学の道を志望する学生だったエリオットが詩人としてのキャリアをスタートさせた時期にあたり、エリオットが「自分の仕事は詩人であることだと自覚した時」だったと考えられる。² つまり第一次大戦は詩人エリオットの重要な分岐点であるにも関わらず、エリオットによる大戦への言及はほとんど存在しないのである。

本論の目的は、公式には語られることがなかった第一次大戦に対するエリオットの感情を、非公式な面から捉えることである。その拠り所として、第一次大戦期に書かれた彼の手紙から、大戦下のエリオットがどのようにその戦争を捉えていたのかを探ってゆく。まず第1章では、開戦間もない1914年8月から10月にかけての手紙を参照し、そこからエリオットの戦争に対する肯定的な態度を見出す。そして第2章では、エリオットの母国アメリカがドイツと国交を断絶した1917年2月から終戦を迎える1918年11月までの手紙を通し、その時期におけるエリオットの参戦意欲、ならびに当時のエリオットが実際に行った戦争参加のための行動を探る。そして第3章では、エリオットが戦争に参加することにこだわり続けた理由を探るため、戦時下の手紙から重要なキーワードとなる言葉を抜粋し、それらの言葉を戦後すぐに書かれた「伝統と個人の才能」(“Tradition and the Individual Talent”)と「ゲロンション」(“Gerontion”)に関連付け、考察を行う。そしてエリオットが大戦に、彼の詩論として有名な「歴史的感覚」(the historical sense)を見ていたことを明らかにする。

1. 1914 開戦直後の手紙

1914年6月28日に発生したサラエボ事件を発端とし、ひと月後の7月28日にはハンガリーとセルビアとの間で戦争が開始された。ヨーロッパ諸国、アメリカ、日本までをも巻き込むこととなった人類史上最初の世界大戦はこうして始まった。この1914年、奇しくもエリオットは学位取得へ向けた研究のためにアメリカからヨーロッパへと渡っており、7月には大戦の渦中となるドイツを

訪れていた。そして8月1日、エリオットが参加する予定だったマールブルクでの夏季講座が始まろうとしていたそのとき、ドイツはロシアに対して宣戦布告し、ドイツ対ヨーロッパ諸国間の戦争が始まったのである。そのためエリオットはドイツでの研究を中断し、急遽イギリスへ渡らざるをえなくなった。大戦の開戦当初の様子はエリオットがイギリスに帰還後すぐの8月23日に、母シャーロット (Charlotte Champ Sterns Eliot) に宛てて書いた手紙の中で詳細に語られている。

I confess that I did feel a little doubtful of the advisability of remaining in Germany a day or two before war was declared against Russia; but it never entered my head that England would declare war too. And we all supposed that after the mobilization, we could (as proved the case for those of us who were Americans) slip away without difficulty. Besides, I had come to Germany *expressly*. The summer school was just opened that day, and I did not want to lose my summer for a scare.³

ここからはイギリスがドイツに宣戦布告する直前、直後におけるエリオット並びに彼の周囲にいた人々の戦争に対する反応を伺い知ることができる。ドイツがロシアへの参戦を表明した8月1日の時点でドイツ国内では戦争へと通ずる不穏な空気があったようであり、エリオットはドイツがロシアと戦争を開始する数日前から「ドイツに留まることの利点について疑念を抱いていた」(I did feel a little doubtful of the advisability of remaining in Germany) と述べている。しかしながらエリオットを含めた人々の反応は意外なほどにのんびりとしたものでもあり、その3日後の8月4日にイギリスがドイツへ宣戦布告することも「頭の中にまったくなかった」(never entered my head) うえ、動員が終了すればすぐに国外に脱出できるものと高を括っていたようである。また、エリオットは研究のために「わざわざ」(*expressly*) ドイツを訪れており、おりしも開戦が宣言されたその日は大学の夏期講習会が始まる日であったという。そしてそのことを理由にエリオットは「1つの不安のために私のひと夏を浪費したくなかった」(did not want to lose my summer for a scare) と述べている。つまりいよいよ火蓋が切られた歴史上最初の世界大戦であったが、開戦直後のエリオットにとっては大学の夏期講習会と同じ秤にかけられる程度のものであり、始まったばかりの戦争はそれほど深刻なものだとは受け止めていなかったのである。

また同じ手紙の中で、エリオットは、8月2日に自分達留学生がいかに深刻な状況に置かれているかを知らされたと語る。そしてその際の各国の人々の反応を振り返り次のように述べている — “The Russians, who knew they wouldn’t get out anyway, were miserable and silent; ... the English and Americans were talkative and excited.”⁴ ロシアは8月2日の時点ですでにドイツと開戦していた。そのためドイツからの帰国の道が閉ざされていたロシア人の学生は当然のことながら落胆している。しかし一方でイギリス人とアメリカ人の学生たちはその話を聞いて「口数多く興奮して」(talkative and excited) いたというのである。ここからは、エリオットを含むドイツにいたイギリス人とアメリカ人の若者たちが、わが身に降りかかった災難を多少のスリルを味わうことのできるイベントでもあるかのように捉えていたことがわかる。

以上のように、イギリスへ無事帰還してから最初に書かれた母シャーロット宛ての手紙からは、当時のエリオットの戦争に対する楽観的な態度を見出すことができる。しかし、同時期に兄のヘンリー（Henry Ware Eliot, Jr）に宛てた手紙からは、また別の姿勢をうかがい知ることができる。

There seems to have come a wonderful calmness and fortitude over Paris, from that I hear; the spirit is very different from 1870. I have a great deal of confidence in the ultimate event; I am anxious that Germany should be beaten; ...⁵

この手紙は兄ヘンリー宛に9月8日（あるいは7日）に書かれたものである。ここに引用した最初の行で、エリオットはドイツと戦闘中のフランスには「素晴らしい冷静さと不屈の精神」（a wonderful calmness and fortitude）があると述べ、「1870年とはその精神が極めて異なっている」（the spirit is very different from 1870）と語っている。この「1870年」とは、プロイセン（後のドイツ）とフランスとの間で行われた普仏戦争のことを指しており、つまりエリオットはフランスの敗戦に終わった普仏戦争を引き合いに出し、今回の戦争がヨーロッパで行われた最近の戦争と今回の戦争が精神性の上でまったく別のものだと述べているのである。そして特筆すべきは、その次の行でエリオットがヨーロッパ諸国を巻き込んで始まった今回の戦争のことを「この究極のできごと」（the ultimate event）と呼び、さらに「私はドイツが打ち負かされることを切望する」（I am anxious that Germany should be beaten）と自らの戦争に対する考えを明確にしていることである。これらの言葉、とりわけ“ultimate”や“anxious”などの肯定的な形容詞が重ねて使われていることから明らかに、エリオットは開戦したばかりの戦争に対し極めて肯定的な感情を抱いていたのである。さらにエリオットは同じ手紙の中で以下のようなことを述べている——“I think it is silly to hold up one’s hands at German “atrocities” and “violations of neutrality”. ... It[that I protest] is not against German “crimes”, but against German “civilization”.”⁶ つまりエリオットにとって闘うべきものはドイツが行った「残虐行為や中立状態の侵害」（“atrocities” and “violations of neutrality”）などの「犯罪行為」（crimes）ではなく、「ドイツ文明」（German “civilization”）そのものであったというのである。これは言い換えると、エリオットは始まったばかりの大戦を、1時代的な犯罪行為に対するものというよりは、歴史を持った民族、文明に対するものであると捉えていたということになる。以上のようにこの兄ヘンリーに宛てた手紙からは、この時点ですでにエリオットがドイツへの敵対心と戦争に対する肯定的な感情を抱いていたことがわかる。

さらにエリオットは同年10月14日、エレナ・ヒンクレー（Eleanor Hinkley）に宛てた手紙の中で戦争に関して以下のように言及している——“Four recent Magdalen graduates have been killed already. I should have liked to have gone in to the training corps myself, for the sake of being able to take my exercise with the Englishmen, but they won’t take a foreigner.”⁷ エリオットはこの時すでに、オックスフォード大学のマグダレン・コレッジの卒業生から4人の死者が出ていたことを知っていた。それにもかかわらずエリオットは「英国人とともに訓練をつむためにも将校養成団に参加したかった」（I

should have liked to have gone in to the training corps myself, for the sake of being able to take my exercise with the Englishmen) ことを明かしている。1914年から15年にかけてイギリスは徴兵制ではなく志願兵制をしいていた。つまり当時のイギリスにおける戦争は、「忠誠心、義務感、義侠心、冒険心、名誉欲、経済的理由」等の動機さえあれば、自ら進んで参加することができるものだったわけである。⁸ そして実際に、そのような理由から1914年の12月にはイギリスとアイルランドから100万人の志願兵が集まったのだという。⁹ しかしながらアメリカ人であったエリオットは、外国人であるという理由でそれが認められなかった。だからこそ先の引用部では「彼ら[将校養成団は]外国人を受け入れることはないだろう」(they won't take a foreigner) と悔しそうに述べているのである。

ここで注目すべき点は、エリオットがドイツとイギリスの戦争に自ら身を投じる意欲を見せている点である。エリオットは1927年にイギリスに帰化することとなるが、当時は依然としてアメリカ人であった。つまりドイツとイギリスとの間の戦争はエリオットにとっては「他国のできごと」(that was in another country) のはずなのである。¹⁰ それにも関わらずエリオットが戦争に参加することに極めて意欲的だったというこの不可解な事実に関しては、重要な問題として念頭に置いておく必要がある。このことに関しては本論の第3章で論じる。

先に引用した8月23日の母親に宛てた手紙の中では、開戦直後の周囲やエリオット自身の楽観的な様子は示されていたが、戦争への関与に関する自らの姿勢を露骨に示すことはなかった。それが母親への気遣いがあったためなのか、それともその時点では自らの中でもはっきりとしていなかったためなのかは不明である。¹¹ しかし9月8日の時点でははっきりと「ドイツ文明」に対する敵対心を表明し、その際、戦争を「究極のできごと」と表現している。またさらに、10月14日の時点でエリオットは将校養成団への入隊の意思があった、つまり自ら戦地に赴く意思があったことを明かしている。つまり1914年、開戦からわずか数ヶ月のうちに、エリオットは戦争に対する自らの積極的な姿勢を露骨に見せるようになっていくのである。しかし、エリオットの第一次大戦に対するこのような積極的な姿勢は、開戦当時の風潮としてはとりわけ特殊なものであったわけではない。荒木映子によると、当時のイギリスの若者たちにとって、第一次大戦で戦うことは「愛国心、英雄的行為の発露ととらえられ、熱狂と陶酔で迎えられた」のだという。¹² そして若者たちは「ちょっと大がかりなフットボールの試合、あるいはフランスへの小旅行気分」で戦争に志願したのだという。¹³ またイギリス政府でさえこの大戦が長期に及ぶとは予想しておらず、「経費のかさむ『総力戦』に入る意図は全くなかった」。¹⁴ 「男たちは、兵役など人生のほんの合間の出来事ぐらいにしか思っていなかった」のである。¹⁵ この当時の様子からもわかるように、普仏戦争以来40年ぶりに勃発したこの戦争は、若者たちにとっては、自己陶酔と興奮とを得ることができるある種の無邪気なイベントの1つであり、長期戦に及び甚大な被害をこうむることになった終戦時の姿など誰も想像していなかったのである。本章で見てきた開戦間もないころのエリオットの姿勢、すなわち戦争に対する危機感の薄さ、参戦への意欲的な姿勢などは、当時のこのような風潮と一致するものであるといえるだろう。¹⁶ しかし、このエリオットの戦争への積極的な姿勢は、単なる開戦時の一時的な興奮によるものではなかった。というのも結論からいえば、このエリオットの戦争に参加すること

への執着は、終戦を迎える1918年まで続くこととなるためである。

2. 1917-1918 アメリカ参戦から終戦にかけて

前章では、1914年、大戦が開戦した当初のエリオットの戦争に対する姿勢を見てきた。開戦当初、エリオットは戦争の渦中のドイツにいたにも関わらず、開戦のために夏期講習会に参加できなかったことを悔しがるほどに戦争への危機感は薄かった。またイギリスに帰還したひと月後には軍への志願の意志を明らかにしており、戦争が始まったことに対して肯定的で自らも意欲的に戦争に参加することを望んでいた。本章では、前章でみてきたこのようなエリオットの第一次大戦への姿勢が、大戦が激化してゆく中でどのような変遷を辿ったのかを明確にする。そのために1917年、エリオットの母国アメリカが大戦への参戦を表明した時期、並びに1918年、第一次大戦が終戦を迎えた時期の手紙を参照する。

前章で述べたとおり、大戦の開戦当時エリオットは外国人であるという理由でイギリス軍に志願することができなかった。一方でエリオットの母国アメリカは、モンロー主義に基づきヨーロッパに対して中立を保ち続けていた。そのためエリオットは戦争の渦中のヨーロッパにいて、さらに志願の意思があるにも関わらず、一向に戦争に参加することができなかったのである。しかしドイツの潜水艦によるたび重なる無差別攻撃により世論の反感が高まった結果、1917年4月6日、アメリカはついにドイツに対し宣戦布告することとなった。

宣戦布告に先駆け、1917年2月3日、アメリカはドイツとの外交関係を断つ決断を下した。この出来事を受け、エリオットは父ヘンリー（Henry Ware Eliot）に宛てた2月5日の手紙の中で以下のように言及している——“I thoroughly approve of Wilson’s action, and support it with full sympathy. I am waiting for the occasion of actual declaration of war, as nothing seems to be gained now by any other course.”¹⁷ ここでエリオットは当時の大統領ウィルソン（Thomas Woodrow Wilson）の決断を全面的に支持し、「私は実際の宣戦布告を待ち続けている」（I am waiting for the occasion of actual declaration of war）と述べている。大戦はすでに長期化しており、開戦当初の熱狂はとうにすぎた時期であったにも関わらず、エリオットは依然として戦争への参加に意欲的であり、母国アメリカが参戦することを心待ちにしていたのである。

そして3年もの間エリオットが待ち続けたアメリカの参戦は4月6日によりやく果たされるわけであるが、この際のエリオットの高揚のほどは、その2日後に妻ヴィヴィアン（Vivienne Haigh-Wood）がシャーロットに宛てて書いた手紙の中からうかがい知ることができる——“The fact that America has declared war is rather terrible to me. I so dread that Tom might have, some day, to fight. And yet I think he would almost like to.”¹⁸ ヴィヴィアンはエリオットが「いつか戦わなくてはならないかもしれない」（Tom might have, some day, to fight）ことをひどく恐れているのだが、一方でエリオットの様子は「ほとんどそうしただっている」（he would almost like to [fight]）様子でさえあるという。このヴィヴィアンの手紙から、母国の参戦、そして志願兵として自ら参戦することを望み続け

たエリオットが、アメリカの参戦を受け他者から見ても明らかなほどに熱狂していたことがわかる。

そしてエリオットは1918年8月に実際にアメリカ海軍に志願していた。それは8月5日、ウィンダム・ルイス (Wyndham Lewis) に宛てた手紙の中で、「アメリカ海軍に入隊しようと試みているところだ」(tying to get into U. S. Navy) と明かし、「この話は数日のうちに決まるに違いない」(This must be settled within next few days) と述べていることから明らかである。¹⁹ しかしながらエリオットの志願の話は思うようにことが進まなかったようで、例えば9月8日にジョン・クイン (John Quinn) に宛てた手紙などから、エリオットが持病のヘルニアのために健康上の理由で戦地勤務には不適合とされたことがわかる。²⁰ 開戦から3年間待ち続け、ようやくアメリカが参戦したにも関わらず、なおもエリオットは軍に志願することができなかったわけである。しかしエリオットは、このジョン・クイン宛ての手紙の中で、諜報機関がヨーロッパとイングランドをよく知る人材を探しており、「そこで大いに役に立てるチャンスがあると思う」(I think there is a chance for me to be very useful there) と述べている。²¹ つまり戦地勤務が叶わぬことがわかると、すぐに別の方向から戦争に関与できるように画策しているのである。

その後、エリオットはまず陸軍諜報部の将校任命辞令を得る目的でパウンド (Ezra Pound) やオックスフォード大学のマートン校の学部長を含む16名の著名人たちから推薦文を書いてもらった。しかしその折、海軍諜報部からエリオットが彼らにとって最も適任であると勧誘を受け、海軍よりすぐに海軍諜報部に入隊すれば通信担当下士官長の役職を保証し、さらに数ヶ月で将校任命辞令を与えると約束された。そのためエリオットは陸軍諜報部入隊の件を取り消し、また当時勤めていたロイズ銀行を離れる準備を始めた。それから海軍の手続き上の問題で1週間待たされた後、いよいよ入隊が許可されようとしていた。しかしその時にエリオットが兵役に登録していたことが判明し問題となる。この兵役は全ての市民に義務付けられたもので、すでに無効となっているのだが、この手続きのためにさらにエリオットは2週間入隊を延期されることとなる。この入隊の延期が相次ぐ中でエリオット個人の財政状態は困難なものとなり、やむをえずエリオットはロイズ銀行に戻るようになった。そしてこのタイミングで第一次大戦の休戦が訪れたのであった。²²

本章では1917年のアメリカの参戦から、大戦が終戦を迎える1918年までの手紙を辿り、エリオットの戦争に対する姿勢がどのような変遷を辿ったのかについてみてきた。その結果、エリオットがアメリカの参戦に際し熱狂的なほどに歓喜していたこと、また結果としてかなわなかったものの実際に陸軍や海軍に自ら志願し、なんとか戦争と直接関与できるよう終戦の時まで画策していたことが明らかとなった。前章では開戦間もない1914年のエリオットの手紙を見たが、エリオットは当時から戦争に肯定的であり、自ら戦地へ赴くことにも意欲的だった。その姿勢は開戦から3年経った1917年の時点でも変わっていなかったわけである。つまりエリオットの戦争への熱意は、大戦の開戦という特殊なできごとに対する一時的な熱狂によるものではなく、戦時下のエリオットが終始一貫して抱き続けたものだったのである。

3. エリオットを戦争に駆り立てたもの

これまで本論では、開戦時から終戦時にいたるまでのエリオットの第一次大戦に関する発言を当時に書かれた手紙から見てきた。開戦直後からエリオットは戦争に対して肯定的であり、未だ他国でのできごとであるにも関わらず自ら志願することさえ望んでいた。そしてこの戦争への肯定かつ意欲的なエリオットの姿勢は、開戦間もない頃の一時的興奮によるものでも、あるいはその戦争がその後辿ることになる悲劇的惨状を単に予見していなかったことによるものではなかった。前章で確認したように、エリオットの大戦に対する姿勢は終戦時まで一貫しており、実際のところ彼は開戦時から終戦時まで何らかの形で戦争に関与すべく手段を講じていたのである。

しかしこのエリオットの終始一貫した参戦意欲は、むしろ奇妙なものだといっていいだろう。というのもエリオットの戦意の高さには、愛国心や開戦直後の高揚感といった妥当に思われる理由が存在しないためである。開戦当初は未だ母国アメリカは参戦しておらず、また、アメリカが参戦した頃には開戦からすでに3年が経っていたのである。本論がこれまで検証してきたとおり、エリオットは大戦が終戦を迎えるその日まで自ら戦争に関与するために奔走し続けていたわけであるが、考えてみるとエリオットがここまで執拗に戦争への参加にこだわった理由は明らかではない。そこで本論では、ここで改めて開戦から終戦までの手紙の中から重要と思われる言葉を抜粋し検証する。そしてそこからエリオットを戦争に駆り立てたものの正体を明らかにする。

大戦の開戦間もないころ、エリオットはその戦争をドイツの「残虐行為や中立状態の侵害」(“atrocities” and “violations of neutrality”) などの「犯罪行為」(crimes) に対するものではなく、「ドイツ文明」(German “civilization”) そのものに向けられたものであると語っていた。つまりエリオットは1914年に始まった戦争を、ドイツがベルギーを侵犯したという1つの行為にではなく、長く歴史をもったドイツ文明との戦いとして捉えていたわけである。そしてエリオットは同じ手紙の中で、その戦いのことを「究極のできごと」(the ultimate event) と呼んでいる。²³ “ultimate” とは「究極」「最終」「根本」を意味する形容詞であり、つまりエリオットは始まったばかりの戦争を単なるジャーナリズム的な意味での事件としてではなく、人類の根本に関わる、究極にして最後の事件として捉えていたわけである。

ここで以上の点をはっきりさせるために、これまでに本論では触れずにいたエリオットの手紙の一部を引用する。この手紙はアメリカが参戦を表明した直後の1917年4月11日、母親のシャーロットに宛てて書かれたものである。

I am pleased for several reasons, but chiefly because I think the war was so momentous as it was, that winding it up as a world war will be the best chance now for a satisfactory conclusion. I wish that our country might have a chance to refresh its memory as to what war really is like...²⁴

ここでまずエリオットはアメリカの参戦を喜んでいることを明かし、その理由はいくつかあると述べているのだが、その一番の理由として「この戦争はそのままでとても重大なことだったので、今

は世界大戦としてその戦争に決着をつけることが満足のゆく結末のための最良の機会となるだろう」(the war was so momentous as it was, that winding it up as a world war will be the best chance now for a satisfactory conclusion) と述べている。エリオットはこの大戦を歴史上の重大なできごととして認識しており、その重大な戦争がアメリカの参戦によってより世界規模の戦争となることを喜んでいたのである。そしてその後に、エリオットは決定的な一言を残している。すなわち「私たちの母国が真の戦争とはいかなるものかについて、その記憶を新たにすることを得られればいいのだが」(I wish that our country might have a chance to refresh its memory as to what war really is like) という一言である。先に引用したように、エリオットは開戦間もない戦争を「究極のできごと」と捉えていた。さらにエリオットは、その戦争がなされた犯罪行為よりも文明に対して行われるのだと考えていた。そしてこの引用箇所、エリオットはアメリカが戦争についての「記憶を新たにすること」を願っている。つまりエリオットにとって戦争とは、個人や1つの時代、1つの事件という枠を超えた歴史的なできごとであり、その戦争に参加することで、アメリカという国家が戦争をリアルで新鮮な記憶として回復することを願っているのである。ここでいう「記憶」とは、恐らく戦争という「究極のできごと」がつなぐ、古代から現代に至るまでの全歴史上の戦争の「記憶」だと考えられる。というのも戦後間もなく書かれたエリオットの有名な評論「伝統と個人の才能」(“Tradition and the Individual Talent”)の中でエリオットは次のようなことをいっているためである——“the historical sense involves a perception, not only of the pastness of the past, but of its presence; ...”²⁵ ここでエリオットは、過去を過去のものとしてだけではなく、過去が現在することを知覚する感性のことを「歴史的感覚」(the historical sense)と呼んでいる。つまりエリオットはあらゆる過去を過ぎ去ってしまったものではなく、同時に今に存在するものと考えていたのである。そしてそれらを同時に認識できるものが真の芸術家であるというのがこの論の趣旨である。当然この考えは芸術論上のものであるが、しかしアメリカ参戦時の手紙の中でエリオットが発した「戦争の記憶を新たにすること」という言葉は明らかに「伝統と個人の才能」でいうところの「歴史的感覚」と通底するものである。つまりエリオットは当時行われていた「今」の戦争に、古代から現代にいたる全ての時代の戦争を見出していた、あるいは見出そうとしていたと考えられるのである。そして自らその歴史的な「究極のできごと」に身をおくことで、エリオットは詩人としての「歴史的感覚」を身につけようとしていたと考えられるのである。

戦争を媒介として現在と過去を同時に感じるというエリオットの「歴史的感覚」の試みは終戦後すぐに書かれた作品、「ゲロンチオン」(“Gerontion”)の冒頭にみることができる。²⁶

Here I am, an old man in a dry month,
Being read to by a boy, waiting for rain.
I was neither at the hot gates
Nor fought in the warm rain
Nor knee deep in the salt marsh, heaving a cutlass,

Bitten by flies, fought.(‘Gerontion’ ll.1-6)²⁷

最初の行の「熱き門」(the hot gates)とは紀元前480年にギリシア軍がペルシア軍を全滅させた戦地の名「テルモピレー」(Thermoplae)を英訳したものである。²⁸そして古賀元章は3行目の「塩辛い沼」(the salt marsh)を、大戦中に友人のジャン・ヴェルドナルが戦死したダーダネルス海峡の「ガリポリ半島の沼」を思い起こさせるものと指摘している。²⁹つまり「ゲロンチョン」の冒頭の数行は、古代のギリシアの戦争から第一次世界大戦にいたる人類史上のすべての戦争をわずか3行のうちに凝縮させていることになるのである。³⁰つまりこの詩行において、エリオットは森山泰夫のいう「あらゆる戦争を『戦争』という類型に収めて同一視」することを実践していたのである。³¹

本章では戦時下のエリオットの手紙から、戦争について語られた重要と思われる言葉を抜粋し、それらの言葉を「伝統と個人の才能」と「ゲロンチョン」と関連付けてきた。まず開戦間もないころの手紙からは、戦争が「犯罪行為」に対してではなく「文明」に対して行われているということ、そしてエリオットにとってその戦争が「究極のできごと」であることを確認した。そしてアメリカ参戦時の手紙から、真の戦争の「記憶を新たにすること」を願うエリオットの姿を見出した。本論ではそこでいう真の戦争の「記憶」を、古代から連綿と受け継がれてきた全人類、全歴史上のすべての戦争を繋ぐものとして捉え、その公式な表れを「伝統と個人の才能」の「歴史的感覚」ならびに「ゲロンチョン」の冒頭の数行に見出した。

「伝統と個人の才能」の中で語られた「歴史的感覚」、すなわち過去を過去としてのみならず、過去を「今」の中に感じるという感覚はエリオットの詩作において極めて重要な感性だった。それはエリオットがジョイスの『ユリシーズ』を賞賛した際の言葉を借りれば、現在と過去の間に「一つの持続的な平行」(a continuous parallel)を置く手法である。³²そしてその手法は『荒地』(*The Waste Land*)や「うつろなる人々」(“The Hollow Men”)を含む戦後に書かれた作品において精力的に実践され、エリオットを偉大な詩人へと成長させたのである。³³恐らく詩人としてのキャリアをスタートさせようとしていたエリオットにとって、「歴史的感覚」を身につけることは極めて重要なことだった。そしてエリオットは第一次世界大戦という目下行われている戦争に、古代から現代までの歴史を同時に感じるができる可能性を見出した。そのため、エリオットはその戦地に自ら赴き、「真の戦争とはいかなるものかについて、その記憶を新たに」(refresh its memory as to what war really is like)しようとしていたのではないだろうか。

結論

本論では、公式にはほとんど語られなかった第一次大戦下のエリオットの戦争に対する心情を、主に彼の手紙の中から見出し、その変遷を辿ってきた。第1章では開戦当時の手紙から当時のエリオットの心境を探った。エリオットは1914年の開戦直後から戦争に対して肯定的な見解を持っており、さらに自ら志願して戦地へ赴くことも念頭にあったことが明らかとなった。次に第2章では、

母国アメリカの参戦時から1918年の終戦を迎えるまでの時期のエリオットの心境ならびに行動を探った。そしてその頃においてもエリオットのその熱意は変わることなく、終始一貫して戦争への参加を希望し実際に陸軍と海軍に働きかけていたことが明らかとなった。しかしその終始一貫したエリオットの参戦意欲は当時エリオットが置かれた状況から察するとむしろ奇妙なものであるため、第3章ではその疑問点を明らかとするために、戦時中の手紙から重要なキーワードを辿り、終戦直後の評論「伝統と個人の才能」と詩作品「ゲロンチョン」を交えて考察した。その結果、エリオットの戦争参加への思い入れは「伝統と個人の才能」で語られる「歴史的感覚」に通底するものを戦争に見出していた、すなわち第一次大戦に全歴史的「戦争」を見出していたことに由来するという結論に至った。

はじめに述べたように、大戦が開戦した時期はエリオットが哲学の研究の世界に進むか詩人としてのキャリアを歩むかの分岐点に当たる。そして終戦直後に「ゲロンチョン」が書かれその翌年に「伝統と個人の才能」が書かれたという伝記的事実から察するに、大戦がエリオットに詩人の道を歩ませたのは明らかである。その際、大戦は単に戦争という1つの事件を意味するのではなく、「究極のできごと」として現代と古代を同時に想起する「歴史的感覚」をエリオットに呼び起こしていた可能性がある。そしてその「歴史的感覚」を詩作の上で実践した「ゲロンチョン」においても、現代と古代の戦争を同次元に並べる試みがなされていた。以上から、エリオットは第一次世界大戦を現代と古代の「記憶」を繋ぐ「究極のできごと」とみなしており、エリオットはその戦争に自ら身を投じることによって、詩人として必要な「歴史的感覚」を自らの肌で感じようとしていたと考えられるのである。

¹ 森山, 「二つの大戦と T. S. Eliot の文学活動の本質」, 494頁.

² 星野, 「創造とその母胎」, 142頁.

³ *Letters*, 51-2. なおエリオットの手紙の引用は全て, Valerie Eliot 編の *The Letters of T. S. Eliot Vol. 1* に拠る. 全て *Letters* と表記する.

⁴ *Letters*, 52.

⁵ *Letters*, 54.

⁶ *Letters*, 56.

⁷ *Letters*, 62.

⁸ 荒木, 『第一次世界大戦とモダニズム』, 24-5頁.

⁹ ウィンター『20世紀の歴史14』, 21頁.

¹⁰ “The Portrait of a Lady,” 18. エリオットの作品からの引用は全て, T. S. Eliot, *The Complete Poems and Plays* に拠る.

¹¹ 8月23日のシャーロット宛の手紙では, ドイツ国内にいる際, ドイツ人たちがエリオットを含む外国人たちをいかに丁重に扱ったか, またイギリスへ退避中ドイツ人たちがいかに親切であったかが述べてある. そのためドイツに対してかねてから敵対心があったとは考え難い. なお, リンダル・ゴードン (Lyndall Gordon) によると, エリオットは「自分が戦争に対してどう考えているかはっきりとしない」(he was not

sure what he thought of the war) と述べた上で「平和主義者でないことだけは確かだ」(he was sure he was not a pacifist) と語ったという (Gordon 81).

¹² 荒木, 『第一次世界大戦とモダニズム』, 8頁.

¹³ 荒木, 『第一次世界大戦とモダニズム』, 9頁.

¹⁴ ボンド, 『イギリスと第一次世界大戦』, 13頁.

¹⁵ ウィンター, 『20世紀の歴史14』, 20頁.

¹⁶ しかしながら, このように自ら参戦することに意欲的である一方で, エリオットは戦争に対する不安を漏らしてもいる. その不安は1914年9月8日にエレナ・ヒンクレーに宛てた手紙の中に記されている — “No war ever seemed so real to me as this ... I know that men I have known, including one of my friends, must be fighting each other. (*Letters* 58)” エリオットは大戦をかつてなかったほどに現実味を帯びていると述べ, 親友を含む知人たちが現在も互いに戦っていることを懸念している. このエリオットの不安は, 1915年, エリオットのフランス人の親友ジャン・ヴェルドゥナル (Jean Verdenal) がダーダネルス海峡で戦死することで現実のものとなる. そして1917年, 戦時中に出版されたエリオットの処女詩集『プルーフロックとその他の観察』(*Prufrock and the Other Observations*) は彼に捧げられることとなった.

¹⁷ *Letters*, 159.

¹⁸ *Letters*, 173.

¹⁹ *Letters*, 240.

²⁰ *Letters*, 244.

²¹ 同上. 同様の発言は11月4日の父ヘンリー宛ての手紙, ならびに11月7日のジャック・ガードナー宛ての手紙にも見られる.

²² *Letters*, 254. なお, 陸軍諜報部への入隊準備から終戦にいたるまでの様子は, 大戦が終わった2日後の1918年11月13日, ジョン・クイン宛の手紙の中で詳細に説明されている.

²³ *Letters*, 56.

²⁴ *Letters*, 174.

²⁵ “Tradition and Individual Talent” 14.

²⁶ アクロイド (Peter Ackroyd) によると, 「ゲロンチョン」執筆時期は1919年5月から6月にかけてだという (Ackroyd 93).

²⁷ また, 我々はこのスタンザからもう1つの意味を見出すことができる. 本論の第2章で言及したように, エリオットは運命の翻弄によって, 望んでいるにも関わらず最後まで戦地に赴くことができなかった. そのためエリオットにとっての戦争は, 新聞記事と「戦地にいた人たちの目を通して」(through the eyes of men who have been) のみ知ることができるものであった (*Letters* 183). これらの事実を踏まえた上でこの詩の冒頭を見ると, これらの行は記事と人づてにしか戦争を体験できなかった戦時下の自分自身を自嘲的に描いたものとして読むことが可能なのである. これらの行を戦時下のエリオット自身を描いたものとして解釈している論考には石川慎一郎の「2度の戦争とイギリス詩人」があげられる.

²⁸ Southam, *A Student's Guide to the Selected Prose of T. S. Eliot*, 43.

²⁹ 古賀, 『T. S. エリオットの詩の研究』, 107頁.

³⁰ 荒木映子は「ゲロンチョン」の登場人物の小老人について「過去の現在性をも包括する歴史的意識と非個性とがゲロンチョンのなかに体现されている」(荒木『生と死のレトリック』146) と指摘している. なお「歴史的意識」と「非個性」はいずれも「伝統と個人の才能」の主要な論旨である.

³¹ 森山泰夫, 「二つの戦争と T. S. Eliot の文学活動の本質」, 493頁.

³² “Ulysses, Order, and Myth,” 177.

- ³³ 「一つの持続的な平行」を置く手法の「うつろなる人々」における実践については拙論「さかしまの『黙示録』としての『うつろなる人々』」参照.

Works Cited

- Eliot, T. S. "Gerontion", *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1969.
- . "The Portrait of a Lady", *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1969.
- . "Tradition and the Individual Talent", *Selected Essays*, London: Faber and Faber, 1932.
- . "Ulysses, Order, and Myth", *Selected Prose of T. S. Eliot*. New York: Harcourt, 1975.
- Eliot, Valerie. Ed. *The Letters of T. S. Eliot Vol1 1898-1922*. London: Faber and Faber, 1988.
- Ackroyd, Peter. *T. S. Eliot*. London: Hamish Hamilton, 1984.
- Gordon, Lyndall. *Eliot's Early Years*. Oxford: Oxford UP, 1988.
- Southam, B. C. *A Student's Guide to the Selected Poems of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1968.
- 荒木映子『生と死のレトリック—自己を書くエリオットとイエイツー』英宝社, 1996年.
- 『第一次世界大戦とモダニズム — 数の衝撃』世界思想社, 2008年.
- 石川慎一郎「2度の大戦とイギリス詩人—ブルック・オーウェン・エリオット・トマスに見る文学と戦争の関係—」『言語文化学会論集』12 (1999): 163-178.
- 古賀元章『T. S. Eliot の詩の研究 — 円環のイメージから脱円環のイメージへ —』大学出版, 2004年.
- 星野美賀子「創造とその母体」『モダンにしてアンチモダン — T. S. エリオットの肖像』高柳俊一, 佐藤亨, 野谷啓二, 山口均編. 研究社, 2010年.
- 森山泰夫「二つの大戦と T. S. Eliot の文学活動の本質」『山形大学紀要 (人文科学)』8 (1977): 487-513.
- 吉村圭「さかしまの『黙示録』としての『うつろなる人々』」『英文學研究支部統合号』1 (2009): 413-424.
- ウィンター, J. M. 『20世紀の歴史14 第一次世界大戦 (下) 兵士と市民の戦争』深田甫監訳. 平凡社, 1990年.
- ボンド, ブライアン『イギリスと第一次世界大戦 歴史論争をめぐる考察』川村康之訳. 芙蓉書房出版, 2006年.

(2011年12月6日 受理)